

上山市立図書館主催「ふるさと散歩」  
2022年3月6日(土) p.m.2:00~3:30  
図書館視聴覚室

## 故郷が生んだ先駆者 小松武治

英文学研究者、そして教育者である己と、クリスチャンとしての求道的な自分。その二重化された己を、静かに、されどひたすらに歩み続けた人物。



1

## 本題に入る前に その1

これまで「やまがた再発見」で  
とりあげた人物と直近の予定。

2

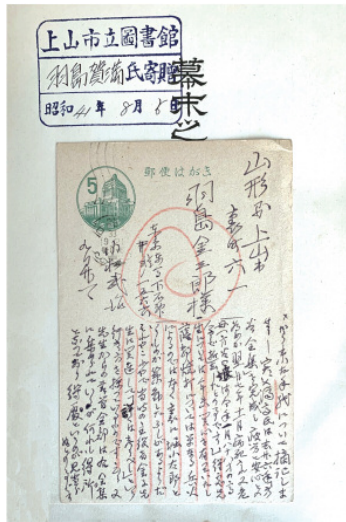
### 資料

- 山形新聞紙上「やまがた再発見」岩井執筆メモ(数字は掲載年月日)
1. 『永山 一郎』30歳の若さで他界した気鋭の戦後文学者[金山町出身]  
(上)(下) 2010. 8.30・9.6
  2. 『大森 治豊』日本で最初に帝王切開を成功[江戸神田出身→上山→福岡]  
(上)(下) 2012. 7.8・15
  3. 『鈴木健太郎』山形近代詩の黎明期を担った詩人、ジャーナリスト[上山出身]  
(上)(中)(下) 2014. 10.12・19・26
  4. 『阿部 彦吉』文翔館時計台のメカニズムを作った人物[山形出身]  
(上)(中)(下) 2015.6. 21・28・7.5
  5. 『長谷川謙三』製糸工場ならびに蟹仙洞博物館の創設者[川西町出身→上山]  
(上)(中)(下) 2016. 5.8・15・22
  6. 『栗山 津禰』源氏物語歌舞伎座公演を実現させた人[(上山)山形出身]  
(上)(中)(下) 2017. 3.19・26・4.2
  7. 『柏倉 松蔵』日本初、肢体不自由者のための学校を開設[上山出身]  
(上)(中)(下) 2018. 4.8・15・22
  8. 『羽島金三郎』鉄道の除排雪システム「キマロキ」システム考案[上山出身]  
(上)(中)(下) 2018. 11.11・18・25
  9. 『五助フサザス』わが国の近現代絵画の黎明期を担った兄弟[上山出身]  
(上)(中)(下) 2019. 10.27・11.3・10
  - ▶ 10. 『小松 武治』シェークスピア研究とYMCAに生涯を捧げた人物[上山出身]  
(上)(中)(下) 2020. 9.27・10.4・10.11
  11. 『佐藤南山寺』県内で唯一、「角川俳句賞」を受賞した俳人[上山出身]  
(上)(中)(下) 2021. 7.25・8.1・8.8
  12. 『井上助太郎』歌会始で二度詠進歌に選ばれたアララギ派歌人[寒河江出身]  
(上)(中)(下) 2022. 6月発表予定

3

## 本題に入る前に その2

2019年(令和元)10月3日、  
当図書館の書庫で、偶然にも  
小松武治から羽島金三郎に宛  
てた昭和33年9月21日消印  
のある葉書が見つかった。



(羽島金三郎宛葉書/小松武治) 上山市立図書館蔵

4

羽島金三郎\*の妻・賀満(かま)からかつて当館に寄贈された図書の一冊『幕末之名士金子與三郎』の見返しと扉の間に挟まっていたものを職員が発見。

その賀満という女性は、上山藩最後となる10代藩主(藤井松平嫡流16代)松平信安の長女で、20歳で金三郎に嫁いだ人物である。

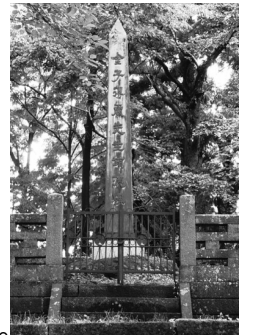
\*貨車の連結器の考案や、除雪した雪がふたたび線路内に崩れこむ問題を解決しようとして「キマロキ」という除排雪システムを最初に考案した上山出身の鉄道技術者。  
現役を退いてからは帰郷し郷土史研究に情熱を傾けた。  
晩年は埼玉県浦和に住んでいた長男宅で過ごし82年の障がい閉じる。

5

## 葉書の内容について

小松武治の郷里である上山の郷土史家たちによって、前年つまり1957年(昭和32)に完成した金子與三郎の頌徳碑ならびにその再建を祝して刊行された書籍『金子得處先生』に関するものである。

もともと頌徳碑は1897年(明治30)に建てられたものであったが、1943年(昭和18)の戦時勅令「金属回収令」によって撤去され、戦後石碑として一時再建されたものの、月岡公園の荒廃もすすんでいたため、それを憂いた有志たちと共に再建を為し遂げたばかりであった。



6

金子與三郎とは幕末期上山の藩政改革を担った重臣である。1867年(慶応3)12月25日の薩摩藩邸焼き討ち事件で上山藩軍の総指揮官として出役し、銃撃戦のなかで被弾、翌26日に無念にも45年の生涯を閉じた人物。

武治はこの葉書で主に二つのことを記している。ひとつは、『金子得處先生』という表記について。

生前金子與三郎と親交のあった儒家山田方谷(安五郎)の孫にあたる琅(ろう)氏からの手紙を紹介するかたちで、「『得處』ではなく本来は『得所』が正しい表記なのは」ということ。山田方谷は備中松山藩の財政再建を成し遂げたばかりではなく、大政奉還の原文を作成した人物でもある。

7

もうひとつは、薩摩藩邸焼き討ち事件についての新たな史料発見の報告である。

当時、幕末に起こったこの事件は、武治はもちろん、上山の郷土史家の間でも、主要テーマになっていたと考えられる。「薩摩焼討については単なる兵火によるのではなく裏に堀小太郎\*というものが策動したふしがあるようだ」というものであった。

\*薩摩藩の少壮藩士による誠忠組の旗揚げに加わる。この頃は堀を名乗っている。藩主の父として実権を握る島津久光は過激に陥りがちな誠忠組の取り込みを図り、堀を側近として抜擢。堀も御小納戸役に任命された(この時、藩命により次郎と改名。文久2年(1862年)4月には再び藩命で小太郎と改名)。当初は大久保利通と並ぶ久光側近として、京都・江戸などで他藩との交渉などに活躍した。後に伊地知 貞馨(いじち さだか)と藩命によって三たび改名している。

8

## 《小松武治プロフィール》

1876年(明治9)10月3日、山形県南村山郡上山町大字鶴脛町498番地に旧上山藩士松下左傳治、母トメの三男として生まれる。

1892年(明治25)学問を志し仙台行きを決心、笹谷峠を越える。  
同年10月30日、苦学生のための「労働會」に入会。  
同年12月、仙台神学校から改称されたばかりの東北学院普通科一年級に仮入学を許され、翌年2月に本入学。

9



1896年（明治29）9月より島崎藤村に「作文」を習う。同12月、旧上山藩士師岡傳彌長女なかいと学生結婚。

それと同時に夫婦で叔父（母の弟）の小松英休の養嗣となり、**小松と改姓**。

1897年（明治30）6月、東北学院を「妻帯者」として卒業。

同年9月、東北大の前身校のひとつである第二高等学校に進学。

1900年（明治33）9月、東京帝国大学文科大学に入学。**ラフカディオ・ハーン（小泉八雲）、夏目金之助（漱石）、詩人上田敏等から講義を受ける。**

10

1904年（明治37）6月、**チャールス・ラムの『沙翁物語集』の翻訳本出版**。夏目漱石、上田敏両師が序を寄せる。

同年7月東京帝国大学卒業。

1904年（明治37）8月、**日本基督教青年会同盟（YMCA）に就職**。

1908年（明治41）6月からYMCAの機関誌『開拓者』の主筆となる。

1922年（大正11）には**東京高等工芸学校（現在の千葉大工学部の前身）の教授**となり、その後**立教大学教授等**を歴任。

11

1945年（昭和20）、戦後数年経過した頃より、郷里上山の郷土史研究家たちとの交流が本格的に始まったと考えられる。

1958年（昭和33）9月21日、郷里に戻っていた**羽島金三郎に宛て、金子與三郎頌徳碑再建などについての私信**を送る。

1959年（昭和34）10月、**富士短期大学長**に就任。

1964年（昭和39）10月24日、「奉仕」を信条とした88年の**生涯を閉じる**。

12

## 小松武治の生涯

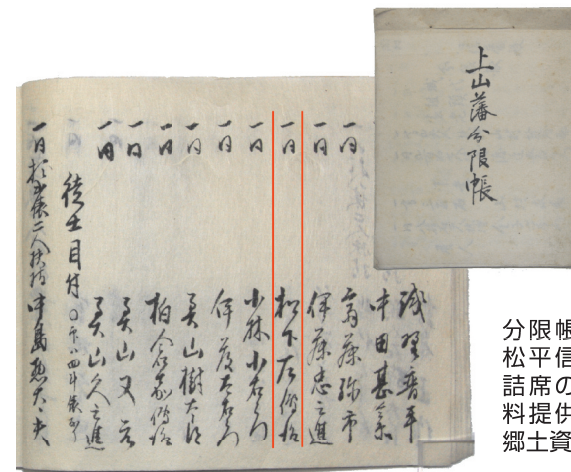
小松武治は1876年（明治9）10月3日、山形県南村山郡上山町大字鶴脛町498番地に旧上山藩士松下左傳治、母トメの三男として生まれている。

旧姓は**松下武治**。

奇しくも**廃刀令**が交付された年にあたっている。

上山藩「分限帳」（文久～慶應 松平信庸時代＝幕末期）をみると、確かに**勝手詰席に16俵2人扶持 松下左傳治**という名を確認出来る。

13



分限帳（文久～慶應 松平信庸時代）勝手詰席の該当部分（資料提供：公財上山城郷土資料館蔵）

14

残念ながら地元上山には武治の生涯について綴った資料は**皆無**であった。だが、**東北学院史資料センター**に、仙台へ移って以降の断片的な資料が多く残っていることがわかり連絡を入れてみた。すると、理事・評議員で調査研究員の**日野哲氏**が快く対応して下さった。

翌々日さっそく現地を訪れると、すでに整然と関係資料が準備されており、そればかりか当日は佐藤匠氏が、別館の図書館まで足を運んでくれるなど協力を惜しなかつた。私の仕事はそれらの資料を読み込み、時系列で武治の生涯を織りあげることだけであった。

15

## 葉書の内容について

小松武治の郷里である上山の郷土史家たちによって、前年つまり1957年（昭和32）に完成した金子與三郎の頌徳碑ならびにその再建を祝して刊行された書籍『金子得處先生』に関するものである。

もともと頌徳碑は1897年（明治30）に建てられたものであったが、1943年（昭和18）の戦時勅令「金属回収令」によって撤去され、戦後石碑として一時再建されたものの、月岡公園の荒廃もすすんでいたため、それを憂いた有志たちと共に再建を為し遂げたばかりであった。



16

「労働會」とは、キリスト教思想に基づき、学生たちが働きながら学べるように創設された**寄宿制の組織**であった。

1892（明治25）年に発足、初めは1886年（明治19）に創立された東北学院の前身「仙台神学校」の校長押川方義個人の運営に頼っていたが、のち理事局の管理のもとに移され、1921年（大正10）に廃止された組織である。

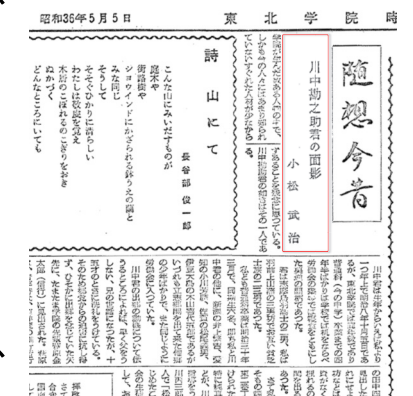


明治37年8月撮影の小松武治（写真提供：小松保雄氏）

17

仕事としては農業、牧畜、輸送など多岐にわたり、学生は一日数時間の労働を行い、労働会はその事業収益を会員の学資や食費に充てるというものであった。

後に「随想今昔」欄に綴られた「**川中勘之助君の面影**」という武治の回想から、仙台行を決意した理由はどのようなものであったか、より鮮明に知る事ができる。



「川中勘之助君の面影」が掲載された「東北学院時報」（昭和36年5月5日号）

18



「君（川中勘之助君）は志摩鳥羽藩士の二男、私は羽前上山藩士の三男坊でお互い貧乏士族の二三男…中略…当時の貧乏士族の二三男坊などは青雲の志はあっても学資がなく、さりとて一生を田舎に埋もれるのも本意にあらず、立志郷関を出る機会にあこがれたものであった」

（「東北学院時報」第189号／1961年：昭和36：5月5日）

版籍奉還後、身分のみならず禄まで完全に失うことになった旧藩士たちの暮らしを思うと、これは補筆を要しない実相であったろうと思われる。

19

## 島崎藤村、小泉八雲、夏目漱石、上田敏らとの交流など

（松下）武治は一にも二にも、働きながら学べる環境を求め、仙台に向かった。その結果として、学びの場が仙台神学校であったということである。

「仙台神学校」が「東北学院」と改称されることになるのは1892年（明治25）、その年の12月、武治は改称されたばかりの東北学院普通科一年級に仮入学を許され、翌年1893年（明治26）2月に本入学となっている。

20

ところがもともと「神学校」であったため、師はもとより学友にも「神学」を学ぼうとする人が多く、しかも「労働會」の運営責任者も「神学校」の校長押川方義であった環境も相俟って、武治はいつしかキリスト教に入信することとなる。

だがまだ迷いは払拭されていなかったように思える。「学院の師友の感化に負うところが甚大である」と書き、武治はこの時期のことを「煩悶の時代」と回想している理由もそこにあった。「第一に養子問題であり、それに信仰の問題が加わった。養子問題は、結婚問題を兼ねていた」と綴っているのである。

21

第一の問題については、結局1896年（明治29）12月、母の弟にあたる叔父小松英休の養嗣となり、妻なかいと子ども小松へと改姓することとなる。

信仰の問題については、「物質的に自由を得た予は精神的には非常なる苦痛を感じるように成った」（『開拓者』第12巻第2号、1917年：大正6／2月）とかなり神妙な表現をしている。

もとより松下家は代々日蓮宗の壇徒であったことも一因だったかも知れない。その葛藤が苦痛という表現になったように思われる。ただし、東北学院で学んだ神学が、その後の武治を深いところで突き動かしていくことになるのである。

22



妻なかい  
（写真提供：小松保雄氏）

さて、東北学院時代の武治を語る場合、島崎春樹（藤村）との関わりは外せまい。

1896年（明治29）9月から1年間学院で過ごした若き藤村について、まがりなりにも印象を書き留めているのは、小松武治ただ1人であるという。それだけ記憶に残るなんらかの理由もあったのだろう。1947年（昭和26）に書いた「島崎藤村の思い出」には次のようにある。

23

「藤村先生のわが学院に来任されたのは明治29年で在職僅かに1年に過ぎなかった。…中略…当時先生はまだ25歳の若さで我等晩学の学生とは大した違いがなかったように見えた。」

藤村が東北学院で学生に講義していた内容は「作文」についてで、武治は「格別記憶に残るほどの深い印象を持っていない」としつつ「教育者に相応しい几帳面」な人であったと述懐している。授業についても書いていて、出版されたばかりの坪内逍遙の著書『文学その折々』（春陽堂）から「人生四季」を板書し、それを学生に書き取らせるものであったという。渥美孝子氏の「『東北文学』に集った人々(1)」に面白い指摘があるので引用してみたい。

24

「小松は後年の著書『靈的改造』（北文館・1919年／大正8）の「回顧と前進」の中に、44歳の中年になった自己を、『人生四季と云ふ見点から云えば先づ真夏の頃と成ったのである』と書いている。

藤村の授業が記憶の底に息づいていて、20年以上も経って、『人生四季』という言葉が口をついて出たのであろう。」

このように、武治には藤村の影響が色濃くあったのではないかと推察しているようにも読める。

藤村が第一詩集『若菜集』を執筆するのも学院在任中の1897年（明治30）のことであった。

25

1897年（明治30）6月、武治は東北学院普通部を卒業すると、さらなる高みをめざして、同年9月東北大学前身の一部であった仙台第二高等学校一部文科に進学する。そこでは高山樗牛の弟齋藤野の人（ののひと）と特に親しかったと伝えられている。ご存知の通り高山樗牛は鶴岡出身の思想家であるが、広い意味で同郷であったことから、武治はその弟である野の人に親近感をもったのかも知れない。実は樗牛は高山久平の養子となったことから高山に姓が改まったが、旧姓は齋藤で本名は林太郎であった。また学内的に同窓の学生をみると、第一部法科にはのちに大正デモクラシーの立役者の一人となる地元宮城出身の政治思想家吉野作蔵（1917年／大正6に作造に改名）が在籍していた。

26

1900年（明治33）7月、武治は仙台第二高等学校を卒業すると、同年9月には東京帝国大学文科大学に入学を果たす。

二高卒業を前にした同年6月、上京する武治を送別する会がささやかにもたれた。

武治の2年後輩で二高に在籍していた佐野利器（建築構造学者）、羽島金三郎（鉄道技術者）がメンバーであった。その時の記念写真が残っているが、結果的に3人はいずれも帝国大学にすすみ、それぞれの専門分野で後世に名を残すこととなる。

27



左から：小松武治、羽島金三郎、佐野利器（写真提供：小松保雄氏）

28

東京帝国大学に進学した武治をさっそく運命的な出会いが待っていた。師事した3人の文学者との関わりこそが、その後の武治の生涯を決したと言ってもけっして過言ではなかったからである。その3人とはラフカディオ・ハーン（小泉八雲）、夏目金之助（以下漱石）、上田敏といったそうそうたる教授陣であった。

武治は帝大に4年間在籍したが、3年間はラフカディオ・ハーン（小泉八雲）、4年時には夏目漱石と上田敏の講義を実際に聴いている。とりわけ4年時の夏目漱石との交流は、師弟関係を越えた自立した文学者同士の交流であったとさえ言えるものであった。交流の濃密さを語る一つのエピソードを紹介したい。

29

小松武治は帝大を卒業する直前の1904年（明治37）6月、チャールズ・ラムの『沙翁物語集』の翻訳本を日高有隣堂から上梓している。沙翁とはほかでもないイングランドが生んだ世界的な劇作家ウィリアム・シェークスピアのことだが、この訳本が驚くべきものとなっているのである。

学生である武治が出版した訳本であるにもかかわらず、序文を書いているのがなんと夏目漱石と上田敏の両師なのだ。とくに夏目漱石は、武治の訳文をいちいち原書と付き合わせて校閲し、気持のこもった「小羊物語に題す十句」という文章を寄せている。

これはシェークスピアの書から一節を原文で引用し、それに相応しい俳句を夏目漱石が自作して付すという凝った序文であった。

30



『沙翁物語集』の扉（写真提供：東北学院大学中央図書館）

31

## 東京時代～Y.M.C.Aと大学と小松武治

後日談も漱石と武治の交流の深さを伝えているようになかなか興味深い。

1916年（大正6）12月9日の漱石の死を受けて、その直後、武治は感謝と哀悼の意を記している。「夏目漱石先生の事」（『開拓者』第12巻1号）がそれだ。

32

「（漱石曰く）君もかうして書物を出すなら僕も出さうかなど云はれ、其後問もなく『吾輩は猫である』が出版せられ、私も一部を頂戴した。」

また、漱石が大学教授を辞め朝日新聞社に入った動機について武治は直接聞いた話として「僅か計りの学生を相手に講義するよりも、広い社会を舞台として自己を表白する方が、やり甲斐もあり又世を益する事ともなろう」と語ったと書き留めている。

これなどは漱石の社会性をも感じ取れる貴重な証言ともなっている。

33

また、漱石が亡くなったあと、帝大での漱石最初の講義を『英文学形式論』（大正13年／岩波書店）として皆川正禧が刊行しようとした時、どうしても漱石のオリジナル原稿が見つからず、受講した四人の学生時代のノートをつきあわせて稿を起こしたとされている。そのノート提供者の一人が小松武治であった。

これらも、前に引用した渥美孝子氏の「『東北文学』に集った人々（1）」を参考にさせて頂いたこととお断りしておきたい。

34

ちなみに武治は東京帝国大学を『沙翁物語集』の翻訳本を出版してすぐあとの7月に卒業し、社会人としてのスタートを切ることとなる。

1904年（明治37）8月、つまり卒業の翌月から、さっそく日本基督教青年会同盟（YMCA）に就職し、その後長く幹事および主事として勤めることとなる。

この流れを逆に時間を巻き戻して考えてみると、この頃の武治はかつて煩悶した信仰についての葛藤を克服し、ある意味クリスチャンとしての自分をむしろ積極的に肯定して生きていたものと思われる。また、帝大卒業の翌月からの勤務は、それ以前からのYMCAと武治の密接な関係を暗示しているようにも考えられるのである。

35

ここでYMCAとはどのような組織なのかについて、少しだけまとめておきたい。

青年の道徳的荒廃をキリスト教の教えを通じて救済矯正する目的で、1844年（天保14）ロンドンで創設された組織である。

その後世界各国に広まり、1855年（安政2）「世界YMCA同盟」が結成された。

36



わが国では戊辰戦争からわずか10数年後のことになるが、銀座に新肴町教会をつくった小崎弘道、会津藩出身の牧師で明治学院第2代総理となる井深梶之助、米国留学中にYMCAの存在を知った神田乃武（ないぶ）、後に衆議院議長を務めた片岡健吉等によって、1880年（明治13）5月8日、銀座の京橋教会において**東京YMCAが創立**されている。

東京YMCAではさっそく庶民を対象に演説会を開催、10月の上野公園での野外大演説会では**7千人の聴衆を集める勢い**であったという。

37

また『六合（りくごう）雑誌』を創刊、諸外国の思想や学問を広く紹介するなど積極的に活動し、主に知識青年に強い影響を与えながら発展、1903年（明治36）全国組織として日本基督教青年同盟が誕生するに至るのである。つまり、武治のYMCAとの関わりは、全国組織としての同盟が結成された翌年からということになるようだ。

ここで特記すべきはキリスト教布教のためアメリカから派遣されたゲーレン・フィッシャーと小松武治との関わりであろう。フィッシャーは1898年（明治31）から**21年間の長きに亘り日本全国のYMCA会館建設や学生YMCAの育成等に広く貢献した人物で、小松武治はそのフィッシャーに協力する日本側の担当者として、なんと15年3ヶ月の間仕事を共にしたのである。**

38



前列中央がフィッシャー氏で、その左が小松武治（東京大学YMCAにてフィッシャー氏を囲んで：1950年 写真提供：YMCA）

39

**武治の宗教者としての情熱を物語るプライベートなエピソード**もぜひ紹介しておきたい。武治の孫にあたる東京在住の現小松家当主小松保雄氏が思い出として直接語ってくれた話である。

「じぶんが子どもの頃、祖父（武治）は礼拝のため代々木の教会に通っていたんですが、わたしはそのつど腕をつかまれて、無理矢理連れて行かれたんです。ほんとうに嫌で仕方なかったんですよ。でも、そんなことがありながらも、じぶんと言うのも変ですが兄弟の中でわたしが一番祖父に可愛がってもらえたような気がします。」

40



そして、ぽつりと「わたしがキリスト教との距離を縮められなかったのは祖父の無理強いがあったからなんじゃないか」と冗談めかして話して下さったことがなぜか印象的であった。当然、この間も武治の英文学についての研究も継続しており、1906年（明治39）2月に創刊された**YMCAの機関『開拓者』**に、本数は少ないが、信仰や英文学に関わる文章を発表している。そればかりか、1908年（明治41）6月発行の『開拓者』第3巻第6号からは**主筆として活躍することになったのである。**

41

また武治は、日本基督教青年会同盟の仕事の傍ら、多くの著書を上梓している。最後に何冊かの著書を紹介して本講演を了としたい。

翻訳本では、まずなんといっても小松武治の名を一躍有名にしたイギリスのエッセイスト、**チャールス・ラムの『沙翁物語集』の翻訳本**だが、その内容は「リア王物語」「オセロ物語」「ロメオ ジュリエット戀物語」「マクベス物語」「ハムレット物語」といったシェークスピアの代表的な悲劇と「十二夜物語」「冬物語」などの喜劇作品について、チャールス・ラムが論じたものを全翻訳したものである。さらに、その3年後には同じく**チャールス・ラム『沙翁物語十種』（明治40）の翻訳本**を刊行している。

42

当時武治がいかにシェークスピアの研究に専念していたかが窺える。他にフレデリッキ・ロバートソン『信仰の勝利』（明治41）、プリンス・マーロー『健康と性欲』（明治42）、『ダニエル・ホイラー伝』（大正2）、『沙翁史劇物語』（大正3）、フォスチック『現代の危機と基督教』（大正8）、『ホームー物語』（大正12）、『ヴァージル物語』（大正12）。単独執筆の著書としては『信仰の要義』（明治42）、『現代の思想家』（大正3）などがある。

いずれにせよ**シェークスピアと宗教を自らの論考の中軸に据え、かなりのペースで執筆**していたようである。

43



富士短期大学第2代学長時代の小松武治（写真提供：学校法人東京富士大学）

1921年（大正11）には東京高等工芸学校（現在の千葉大学工学部の前身）の教授となり、その後立教大学教授等を歴任、そして**1959年（昭和34）10月富士短期大学（現在は東京富士大学短期大学部）学長に就任。**

冒頭で紹介した故郷上山の親友羽島金三郎に宛てた葉書は、武治が学長に就任する前年のものである。

44

その穏やかで朴訥とした文面からは、今ある生活を楽しみ、来し方に感謝する好々爺の、自らの研鑽によって到達したひとつの成熟した姿が浮かんでくる。そして道草を許してもらおうなら、**偶然職場で葉書が見つかった日はなんと武治が生まれた日と同じ10月3日なのである。不思議な縁で導かれたかのようである。**

振り返れば、英文学研究者そして教育者であるじぶんと、クリスチャンとしての求道的な営みによって二重化された己を、静かに、されどひたすらに歩み続けた生涯ではなかったか。小松武治は1964年（昭和39）10月24日、「奉仕」を信条として歩み続けた88年の生涯をついに閉じるのである。

45

